

機関番号：18001

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20401018

研究課題名（和文） 激動する東アジアと琉球漢詩文～知識人の苦悩と思想～

研究課題名（英文） Chinese Poetry of the Ryukyu and Turmoil in East Asia

研究代表者

上里 賢一 (UEZATO KENICHI)

琉球大学・名誉教授

研究者番号：50101457

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、琉球の漢詩文の東アジア漢字文化圏の中における特色やその成立と展開に東アジア漢字文化圏がどのように関わっているのかを明らかにすること。そして、琉球王国末期の琉球知識人の苦悩を当時の朝鮮・安南の知識人は、どの様に見ていたのかを探ることにある。そこで、中国・ベトナム・韓国・台湾・日本において関連資料の収集および調査を行なった。その結果、中国調査では、上海図書館・蘇州呉県図書館において、琉球に使者としてやって来た冊封使・従客の詩文集および清代末期に発刊された新聞『上海新報』の琉球関連記事を調査・収集した。ベトナム調査では、ホーチミン市・ハノイ市・フエにおいて、ベトナムの進貢使節（中国への外交使節）の旅程や詩文集、紀行日記、琉球の使節との交流に関する漢文資料の調査を行ない、それらの資料を入手した。また、琉球処分期（19C）のベトナムの歴史的状況や当時のベトナム知識人に関する調査を、特に潘佩珠に焦点を当てて行ない、潘佩珠や当時の歴史・社会状況に関する漢文文献資料の調査・収集を行なうとともに、潘佩珠の子孫やベトナムの潘佩珠研究者への聞き取り調査を行なった。韓国調査では、韓国国立中央図書館・ソウル大学奎章閣において、朝鮮の進貢使節（中国への外交使節）の旅程や詩文集および琉球の使節との交流に関する漢文資料の調査・収集を行なった。また、琉球処分期（19C）の琉球関係資料の調査・収集を行ない、それらの資料を入手した。台湾調査では、国家図書館・中央図書館分館・台湾大学附属図書館・故宮博物院において、琉球漢詩文や琉球使節の交流および琉球処分期の歴史状況に関する資料調査・収集を行なった。また、近代期に日本の植民統治下にあった台湾の統治下・統治終了後にかけての激動の歴史状況に関する資料調査・収集を行なった。日本調査では、国会図書館・愛知大学東亜同文書院大学記念センター・愛知大学図書館において、清代末期から中華民国時代まで（19C末～20C初）の琉球・中国に関する文献資料の調査・収集を行なった。また、琉球大学において公開学術討論会「琉球官話と中国のことば」を開催し、議論を通して研究者同士の交流・連携を深めることができた。なお、今後、調査報告集を刊行する予定である。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify the characteristics of Chinese poetry of the Ryukyus in the East Asian Chinese character's cultures, and how the East Asian Chinese character's cultures affected the development of Chinese poetry of the Ryukyus. We also aimed to investigate how intellectuals in Korea and Annam perceived the sufferings of the Ryukyuan intellectuals who lived through the end of the Ryukyu Kingdom era (19C).

With those purposes, we conducted surveys and related data collections in China (Shanghai Library and Su-Zhou Wu Library), Vietnam (Ho-Chi-Minh City, Hue and Hanoi City), Korea (The National Library of Korea and Kyujanggak Institute for Korean Studies), Taiwan (National Central Library, National Taiwan Library, National Taiwan University Library and National Palace Museum), and Japan (National Diet Library, Aichi University All Rights Reserved, and Aichi University Library). As a result, we have collected many documents in Chinese characters that are related to Ryukyus written by the envoys of China, Korea and Vietnam.

Moreover, in the study of Vietnam, we conducted interviews with the descendants and researchers of Phan Boi-Chau (潘佩珠). And we held a public lecture, “Mandarin studied in Ryukyu Kingdom and Languages in China,” at the University of Ryukyus and we were able to deepen collaborations and networking among researchers through discussions.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	3,300,000	990,000	4,290,000
2009年度	3,200,000	960,000	4,160,000
2010年度	1,900,000	570,000	2,470,000
年度			
年度			
総計	8,400,000	2,520,000	10,920,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：琉球漢詩文、東アジア漢字文化圏、交流史、知識人、思想史、冊封使

1. 研究開始当初の背景

琉球漢詩文に関する研究は、本研究代表：上里賢一の研究成果（『琉球漢詩選』ひるぎ社、1990年／『校訂本中山詩文集』九州大学出版会、1998年等）によって一般に広く知られるようになり、国内における評価や理解が深まってきている。琉球漢詩文を対象にした研究は、沖縄の研究者が中心になって進められてきたが、最近国内の研究者も取り上げるようになってきた。大学院で修士論文のテーマに取り上げる若手も登場しており、中国や韓国の研究者もこの分野をテーマにした論文を発表するなど、研究者の関心は急速に拡大しつつある。

以前に、本研究課題と同じような内容で平成16～18年度の科学研究費補助金（基盤研究（C））を受け、福建・ベトナムで調査に当たった（『成果報告書 東アジア漢字文化圏における琉球漢詩文の位置』参照）。しかし、同研究では中国・台湾における調査は比較的順調に進み研究交流も進展したが、ベトナムと韓国における調査は不十分なままに終わった。そこで本研究では、平成16～18年度に十分には取り組めなかったベトナム・韓国における文献資料の調査・収集に力を集中し、両地における調査地点を拡充して研究内容の深化を図る。

また、琉球漢詩文の研究は従来、中国文学及び日本漢詩の範疇にも属さない空白の研究分野であった。それが独自の研究分野として、その存在が学会で認められるようになったのは、最近のことである。したがって、その内容・特色についての理解を深め、東アジア漢字文化圏における位置づけも未だ確立

していない。歴史的背景を鑑みるに、琉球の漢詩文は、日本及び中国、そして同じ進貢国である朝鮮・安南から多大な影響を受けているものと考えられる。そのため、琉球漢詩文の研究は、単に沖縄を含む日本の国内に閉じ込めず、広く東アジア漢字文化圏に視野を拡大してこそ、その特色がいつそう明確に描けるものであると言えよう。

2. 研究の目的

本研究の目的は、琉球の漢詩・漢文が、東アジア漢字文化圏の中でどのような特色を持っているかを明らかにすることにある。琉球の漢詩・漢文は如何なる契機で成立し、どのような展開を見せたか。その成立と展開に、中国をはじめ日本や朝鮮・安南（ベトナム）など東アジア漢字文化圏の国々がどのように関わっているか。なかでも中国の冊封体制下において朝貢国としての地位にあった朝鮮・安南と琉球の関係は、漢詩・漢文にどのように反映しているのか、そこから如何なる影響関係が読み取れるかを明らかにする。

また、琉球王国末期の琉球知識人の苦悩を当時の朝鮮・安南の知識人は、どの様に見ていたのだろうか。漢文資料を通して見える彼らの思想と心情に迫ることも大きな目的である。

3. 研究の方法

琉球の漢詩人の活動範囲はきわめて広い。琉球国内はもちろん、日本本土から中国へまたがる。また、交流した詩人を視野に入れる

と朝鮮や安南（ベトナム）にも及ぶ。したがってその研究は、これら各地を視野に入れたものでなければならない。

中国においては、福建師範大学・北京第一歴史档案馆の研究者と密接な連携を持っている。それらの機関および研究者との連携をを基盤にして、その他の機関や史跡（復旦大学、上海図書館、蘇州呉県図書館、蘇州の琉球関係史跡、孔子廟、国子監跡、福建の琉球関係史跡など）において、中琉交流史関係史跡調査および文献資料の調査・収集を行なう。

韓国においては、琉球大学と大学間交流協定のある啓明大学・済州大学の研究者を中心に密接な交流を持ってきた。彼らの協力を得て、ソウル市にある韓国国立図書館・韓国国立博物館・ソウル大学付属図書館・ソウル大学奎章閣などの機関において琉球漢詩文および琉球使節と朝鮮使節の交流に関わる漢文資料や19世紀末から20世紀初頭にかけての東アジアの歴史・社会状況に関わる文献資料を調査・収集する。

ベトナムにおいては、ベトナム漢喃研究院、ベトナム社会人文大学の Tran Ngoc Vuong 教授・Phan Thi Thu Hien 講師と連携している。彼らの協力を得て、ハノイ（漢喃研究院・ハノイ社会人文大学・国子監跡・文廟など）およびフエ（潘佩珠記念館・民俗博物館・国家図書館など）において、琉球漢詩文および琉球使節と安南使節の交流に関わる漢文資料や19世紀末から20世紀初頭にかけての東アジアの歴史・社会状況に関わる文献資料を調査・収集する。

日本国内においては、鹿児島から東京までの地点の中から、特に関係の深かった鹿児島（山川港・鹿児島大学附属図書館・鹿児島県立博物館・尚古集成館など）と京都（京都大学附属図書館・京都大学人文社会研究所など）において史跡調査と文献資料の調査・収集を行なう。

4. 研究成果

(1) 平成 20 年度

本研究の目的を達成するために、本年度は、公開学術討論会を開催し、中国・ベトナムにおいて関連資料の収集・交流史跡の調査を重点的に行なった。

琉球大学で開催した公開学術討論会「琉球官話と中国のことば」では、中国社会科学院・東北大学・大東文化大学から中国語学の研究者を招聘し、琉球漢詩文研究者との議論を行なった。中国では、上海図書館・復旦大学図書館において琉球と中国の交流に関わる文献資料の調査と琉球漢詩文の収集を行なった。清代末期に発刊された新聞『上海新報』から、琉球の進貢使節に関する記事をピックアップし、冊封使・徐葆光の詩集『奉使

琉球詩』を収集した。蘇州においては、中国で客死した琉球人・程泰祚の墓、孔子廟や国子監跡などの史跡調査を行なった。ベトナムのハノイでは、漢喃研究院・ベトナム国家図書館・歴史博物館において文献資料の調査・収集を行なった。琉球と同じく中国の冊封体制下で朝貢国としての地位にあったベトナムの進貢使節の旅程、北京での儀礼・参観・交際を詳細に記録した資料や、琉球の使節との交流を示す漢詩文を複写入手した。またフエでは、潘佩珠記念館において、潘佩珠の墓碑銘（漢文・ベトナム文）を記録し、潘佩珠の孫嫁に聞き取り調査を行なった。日本国内では、愛知大学東亜同文書院大学記念センター・愛知大学図書館において、旧東亜同文書院所蔵の清代末期から民国時代までの琉球・中国に関する文献資料の調査を行なった。本年度の成果としては、以下の三点が挙げられる。①国内外の研究者との議論を深め連携を強めることができた。②文献資料の調査・収集では新資料を数点発掘し、大きな収穫を得ることができた。③潘佩珠の孫嫁への聞き取り調査により、家系と資料の存在について確認し、次年度以降の調査研究の足がかりを得ることができた。

(2) 平成 21 年度

本研究の目的を達成するために、本年度は、中国（上海、蘇州）・韓国（ソウル）・ベトナム（ハノイ、ホーチミン）において関連資料の収集・交流史跡の調査を重点的に行なった。

中国では、上海図書館・蘇州呉県図書館において、琉球と中国の交流に関わる文献資料の調査と琉球漢詩文の資料収集を行なった。上海では、清代末期に発刊された新聞『上海新報』から琉球と関わる記事をピックアップし、琉球に使者としてやって来た冊封使・従客の詩文集などを収集した。蘇州では、呉県図書館所蔵戸籍目録から、琉球および冊封使と関わりのある資料を確認し調査・収集を行なった。韓国における調査では、韓国国立中央図書館・ソウル大学奎章閣において、琉球と同じく中国の冊封体制下で朝貢国としての地位にあった朝鮮の進貢使の詩文集および、中国において朝鮮の進貢使と琉球の進貢使との交流に関する漢文資料の調査・収集を行なった。また、琉球処分期の琉球関係資料の調査・収集も行ない、それらの資料を複写入手した。ベトナムにおける調査では、琉球処分期の歴史的状況や当時のベトナム知識人の動向などに関する調査を行なった。また、琉球と同じく中国の冊封体制下で朝貢国としての地位にあったベトナムの進貢使節の旅程および詩文集、北京における儀礼・参観・交際を詳細に記録した資料や、ベトナムの進貢使と琉球の進貢使との交流に関する漢詩文資料の調査・収集を行ない、資料を複写入手した。ホーチミン市では、潘佩珠や当

時の歴史状況などに関する聞き取り調査を行なった。また、ハノイ市漢喃研究院では、琉球漢詩文やベトナム・琉球使節の交流および琉球処分期の歴史状況に関する資料調査・収集を行なった。本年度の成果としては、以下の三点が挙げられる。①国内外の研究者との議論を深め連携を強めることができた。②文献資料の調査・収集では新資料を数点発掘し、大きな収穫を得ることができた。③潘佩珠の孫および関係ある人々への聞き取り調査により、当時の歴史状況などを詳細に確認することができた。

(3)平成 22 年度

本研究の目的を達成するために、本年度は、韓国(ソウル)・ベトナム(ハノイ)・台湾(台北市)において関連資料の収集・交流史跡の調査を重点的に行なった。

韓国における調査では、ソウル市立中央図書館・ソウル大学奎章閣において、琉球と同じく中国の冊封体制下で朝貢国としての地位にあった朝鮮の進貢使の詩文集および、中国において朝鮮の進貢使と琉球の進貢使との交流に関する漢詩文資料の調査収集を行なった。また、琉球処分期の琉球関係資料の調査収集も行ない、資料を複写入手した。ベトナムにおける調査では、ハノイ市にある漢喃研究院において、琉球処分期の歴史状況や当時のベトナム知識人の動向などに関する調査および琉球と同じ中国の冊封体制下で朝貢国としての地位にあったベトナムの進貢使節の旅程および詩文集、中国北京における儀礼・参観・交際を詳細に記録した資料や、ベトナムの進貢使と琉球の進貢使との交流に関する漢詩文資料の調査収集を行ない、資料を複写入手した。また、琉球処分期の歴史状況に関する資料調査・収集を行なった。台湾における調査では、国家図書館・中央図書館分館・台湾大学附属図書館・故宫博物院において、琉球漢詩文や琉球使節の交流および琉球処分期の歴史状況に関する資料調査・収集を行なった。また、近代期に日本の植民統治下にあった台湾の統治下・統治終了後にかけての激動の歴史状況に関する資料調査・収集を行なった。さらに、本研究と関連する図書・資料の調査を行ない文献収集をした。本年度の成果としては、以下の三点が挙げられる。①国外の研究者との議論を深め、連携を強めることができた。②文献資料の調査・収集においても大きな収穫を得ることができた。③近代期東アジアの激動の歴史状況などを詳細に確認することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

- ① 比屋根照夫、沖縄の歴史が生んだ非戦反戦の思想、現代の理論、査読無、23 巻、2010、pp.126-133
- ② 赤嶺守、戦後中華民国における対琉球政策—1945 年～1972 年の琉球帰属問題を中心に—、慶祝曹永和院士九十寿誕国際学術検討会議論文集、査読有、2010、pp.100-119
- ③ 金城宏幸、ウチナーンチュの越境的ネットワーク化と紐帯—「チムグル」を運ぶ言語的文化—、移民研究、査読有、6 巻、2009、pp.83-98
- ④ 前門晃、沖縄島本部半島山里地域における円錐カルスト頂部に発達するピナクルの地形的特徴、沖縄地理、査読有、9 巻、2009、pp.55-58
- ⑤ 上里賢一、我読子安安宣邦〈戦後日本論：従沖縄看起〉、文化研究、査読有、6 巻、2008、pp.147-157

〔学会発表〕(計 3 件)

- ① 赤嶺守、條款官話(尚家文書)と隠蔽政策、国際沖縄研究所フォーラム：琉球社会における言語運用の諸相を考える、2011 年 1 月 8 日、沖縄県立博物館
- ② 上里賢一、東アジアの中の琉球漢詩、琉球大学「人の移動と 21 世紀のグローバル社会」プロジェクト国際シンポジウム「コンタクト・ゾーンとしての島嶼における文化現象—沖縄と東アジア・太平洋島嶼地域—」、2009 年 11 月 28 日、琉球大学
- ③ 上里賢一、ベトナム資料に見える琉球、琉球・中国交渉史に関するシンポジウム、2009 年 10 月 18 日、沖縄県公文書館

〔図書〕(計 3 件)

- ① キャロル・グラック、姜尚中、比屋根照夫、テッサ・モーリス・鈴木、他、講談社学術文庫、日本はどこへ行くのか、2010、pp.151-200
- ② 上里賢一、高良倉吉、平良妙子編、彩流社、東アジアの文化と琉球・沖縄—琉球／沖縄・日本・中国・越南—、2010、pp.13-22
- ③ 比屋根照夫、明石書店、戦後沖縄の精神と思想、2009、278

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

特になし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

上里 賢一 (UEZATO KENICHI)
琉球大学・名誉教授
研究者番号：50101457

(2) 研究分担者

赤嶺 守 (AKAMINE MAMORU)
琉球大学・法文学部・教授
研究者番号：20212417

前門 晃 (MAEKADO AKIRA)
琉球大学・法文学部・教授
研究者番号：60190287

金城 宏幸 (KINJO HIROYUKI)
琉球大学・法文学部・教授
研究者番号：50274874

比屋根 照夫 (HIYANE TERUO)
琉球大学・名誉教授
研究者番号：10045172

(3) 連携研究者

()

研究者番号：